



紹

介

### 鈴木昶著『江戸の妙薬』

日本医史学会の中で、医薬の民俗文化は実に興味深い重要な分野である。学会発表は少ないが、いままでに花咲一男『江戸売薬誌』・三浦孝次『加賀藩の秘薬』・玉川信明『反魂丹の文化史』・宗田一『日本の名薬』・宗田一（監修）『日本の伝統薬』などの名著がある。本書にはこれらの諸書に見られない記事が半数も占めている。天台烏薬・黒焼・梅肉エキス・忍術丸・万能膏・打身丸・椿油・ヤイト・紫雪・紅花・くすりの町・巡礼など。

この外、日本にはすでに消え失せたものや今まさに亡失寸前の貴重なものが多い。本書は「現代と未来に問い掛ける」ことを目的意識している点も新しい。現代の法律制度や社会に対して大きな警告を発し、医史学家や薬史学者に奮起を促している。

著者の鈴木昶氏は還暦を迎える薬剤師さんだが、かつて薬事日報の編集長もつとめられたこともあるジャーナリストだ。けあって、文章もうまく読みやすい。相当の学識の上に、川柳や絵などの芸術的センスも素晴らしい。何よりも現地探訪で確かめられたことに敬意を表したい。医史学の新しい発見に

は、実際踏査が欠かせないからである。

現地探訪をすると、机上では想像もしていなかった新しい事実が見付かり、そこからまた新しい疑問が湧き、次から次と発展してゆく。興味が尽きないだけでなく、医史学的な追跡から事物の根源に迫り将来の在り方に大きな示唆を受けるのである。

例えば、本書のヤイトの章では、鍼灸のモグサについて記されているが、私も先年、伊吹山（滋賀県と栃木県）に足を運び、痛切に感ずることが多々あった。モグサなど医療経済からみれば価値は微々たるものかもしれないが、古代中国医学から日本の現状に至るまで、一つモグサの医史学を調べても、戦慄さえ覚える数々の謎に漂着することになる。著書もこの点に触れ、未知の世界のあることを指摘している。

本書の書名が江戸とあり、内容を誤解されるおそれがあるが、江戸は近世の意味であろう。この妙薬は昔の人の病気にだけでなく、我々医史学徒に勇気を与える効果があること誠に妙である。

（多留 淳文）

〔岩崎美術社、東京都文京区本駒込三―三九一六、電話〇三―三二八二四―一七三二、一九九一年、菊版、総二二四ページ〕